雑誌『神変（じんべん）』掲載の大峰四十二宿一覧史料について

小　田　匡　保*

はじめに

筆者はかねてより，修験道最大の霊山である大峰について地理学的観点から研究を進めているが，大峰の四十二宿一覧について，史料の系譜を検討したことがある[1)]。そこでは，論文執筆当時に把握していた四十二宿一覧史料を九つ挙げ，それらをI類からIV類までの四つのタイプに分類した。I類は，天理大学附属天理図書館所蔵の「大峯細見記」，II類は同じく天理図書館所蔵の「大峯逆峯（ぎゃくぶ）修行記」，III類は昭和19年(1944)刊の『大峯山』[2)]所載の「大峯四十二宿地」をそれぞれ代表とするものである（IV類は宿名のみのものであり，ここでは省略する）。そして，まずI類の史料があり，それに，秘所一覧の記事や詩歌などを追加する形でII類の史料が書かれ，その抄写本がIII類であると推定した。

この結論自体にはその後も変更がないが，論文執筆後，二つの重要な資料が管見に入った。ひとつは，銭谷武平が『大峯こぼれ話』[3)]で紹介している吉條久友氏所蔵の「大峯細見記」であり，現代語訳されている内容から判断して，上記I類の天理図書館所蔵本と同じ系統の写本と考えられる。もうひとつは，真言宗醍醐派の雑誌である『神変』の創刊当初の号に連載された「大峰山記」である。これは，上記の筆者の分類に当てはめれば，II類に該当する史料である。

本稿は，雑誌『神変』掲載の「大峰山記」を紹介・翻刻することを主目的とするものであるが，その理由は当該史料の重要性にある。上述したように，四十二宿一覧史料には四つのタイプがあり，その中で最も内容の豊富なのはII類である。II類の史料は，42の宿について説明するだけではなく，実際の入峰（にゅうぶ）修行の状況や霊地の伝承などについて詳しく記載している。おそらく，何度か入峰したことのある修験者が，みずからの経験と大峰に関する古記録を踏まえてI類の史料を増補したものであり，単なる四十二宿の記録や入峰修行記ではなく，大峰修行案内記とでも呼べる内容である。四十二宿のみならず，入峰修行の実態や霊地伝承について知ることのできる貴重な史料であると言うことができる。しかしながら，II類の史料の代表例として上に挙げた「大峯逆峯修行記」は，前半部分のみ（第十五まで）の写本であり，その他の史料も逸文にすぎない。他方，『神変』掲載の「大峰山記」は，史料の一部を欠くとはいえ，かなりの部分が判明するのである。

また，『神変』の当該号は明治42年(1909)～明治44年(1911)の発行であるが，これを所蔵している機関は非常に少なく，刊行雑誌とはいいながら閲覧機会の限られたものである。本稿でこれを翻刻することも，今後の研究にとって意義あることと考える。筆者は，成田山仏教図書館所蔵分を主に利用した[4)]。

ここで，掲載誌の『神変』について少し触れておきたい。『神変』は，明治42年(1909)5月に創刊された真言宗醍醐派恵印部（旧当山派修験）の月刊誌であり，現在も刊行が続いている。

* 駒澤大学文学部地理学教室

発行元は，明治 42 年 3 月に組織された[5] 聖役協会の文書伝道部である（現在は神変社の発行）。聖役協会は真言宗醍醐派恵印部の組織ではあるが，宗務庁付属の行政機関ではないと明言されている[6]。

「大峰山記」は，「温故録」というタイトルのもと，「竹斎閑人」なる人物によって紹介された。「竹斎」は，『神変』の他の記事から判断して，海浦義観の号である。海浦義観は安政 2 年 (1855) の生まれで，大正 10 年 (1921) に死去。旧当山派修験の教学者であり，『神変』を刊行した聖役協会の会長を務めていた。自坊は，青森県西津軽郡深浦村（現・深浦町）の円覚寺であった[7]。

連載の構成は表 1 のとおりである。明治 42 年 9 月発行の第 5 号から明治 43 年 5 月の第 13 号まで毎回連載され，その後，数ヵ月おきに 2 回掲載されている。第 4 号以前に連載の第 1 回があったはずであるが，成田山仏教図書館には第 5 号以降しか所蔵されておらず，詳細は不明である。「温故録」の番号は（五）が 2 回あり，そのためか（十）の次が（十二）にとんでいる（ただし，表紙の目次では（十一）になっている）。第四十一以降の巻末部分は，その後の『神変』に記事が見られず，未掲載に終わったものと思われる。

史料名は，第 5 号の「大峰宿の記」以外は，「大峰（峯）山記」という名前が使われている。それで，後掲の翻刻本文のタイトルには，「大峰山記」という名称を採用したが，これは史料の正式なタイトルではないと思われる。というのは，「大峰宿の記」と「大峰山記」という二つの名称が混用されていることから，これらが便宜的な呼び方であると考えられること以外に，II 類の史料の多くが，「大峰逆峰修行四十二宿七十五路」に類する表題を有していて，こちらの方が本来のタイトルと推測されるからである。たとえば，前掲の「大峯逆峯修行記」は「大峯逆峯修行四十二宿七十五路」の内題を持っており，他の史料も「大峰逆峰修行四十二宿七十五路記」，「大峯逆峯修行四拾二宿七拾五路之記」という名前である（詳しくは前稿参照）。また，タイトルが判明するだけではあるが，「大峰逆峰修行四十二宿七十五路」という書物を，現・新潟県柏崎市の不動院が所持していた[8]。これらの表題中にある「七十五路」の「路」は「なびき」と読ませ，「七十五路」を 75 里の意味で用いたのではないかと筆者は考えている[9]。すなわち，「大峰逆峰修行四十二宿七十五路」とは，大峰の四十二宿と 75 里の入峰修行記録という意味合いを持っている。「七十五路」が，現在使われている 75 霊地の意味での「七十五靡」

表 1 「大峰山記」連載の構成

掲載号	発行年月	ページ	紹介記事名	史料名	掲載範囲の最初	掲載範囲の最後
5	明治 42 年 9 月	19～23	温故録（二）	大峰宿の記（続）	第三の途中	第四の途中
6	明治 42 年 10 月	18～21	温故録（三）	大峯山記	第四の途中	第四の最後
7	明治 42 年 11 月	23～27	温故録（四）	大峰山記（続）	第五の最初	第十の最後
8	明治 42 年 12 月	18～19	温故録（五）	大峯山記（続）	第十一の最初	第十一の途中
9	明治 43 年 1 月	36～38	温故録（五）続	大峰山記（続）	第十一の途中	第十一の最後
10	明治 43 年 2 月	19～21	温故録（六）	大峰山記（続）	第十二の最初	第十七の最後
11	明治 43 年 3 月	23～25	温故録（七）	山峰山記（続）（ママ）	第十八の最初	第二十一の最後
12	明治 43 年 4 月	14～16	温故録（八）	大峰山記（続）	第二十二の最初	第二十三の途中
13	明治 43 年 5 月	33～35	温故録（九）	大峰山記（続）	第二十三の途中	第二十三の最後
18	明治 43 年 10 月	19～21	温故録（十）	大峰山記（続）	第二十四の最初	第二十九の最後
22	明治 44 年 2 月	20～23	温故録（十二）	大峰山記（続）	第三十の最初	第四十の最後

ではないことは，史料の内容からも明らかである。

著者については，II 類の他の史料に「常観房大吽編輯」の文言が見られ，この常観房大吽が著者（編者）と推定される。作成年代に関しては，内容から判断して近世のものであることは間違いないが，I 類の「大峯細見記」が享和 3 年 (1803) の作と思われることから，それ以降の近世後期であろう。上述の柏崎・不動院所蔵の「大峰逆峰修行四十二宿七十五路」は，安政 5 年 (1858) に書写されたものゆえ，19 世紀前半に成立したと考えられる。なお，この不動院の記録には，「醍醐御殿」で書写した旨の識語があるという。四十二宿と当山派との関わりの可能性については前稿で指摘したが，このこともそれを裏づける一証左と言える。

翻刻にあたっては，いわゆる旧字体・異体字・変体仮名・合字は，現在通用の字体・表記に改めた（ただし，峯・嶽・駈・龍のように，そのままにしたものもある）。2 字以上にまたがる踊り字は，横書きでは表記がむずかしいため，本来の字を繰り返した。敬意を表す闕字は詰めた。原文にある多くのルビは，『神変』掲載時に付されたと思われるが，誤りが多く，すべて省略した。その代わりに翻刻者の判断で一部の難読語・固有名詞にルビをふり，（　）に入れて示した。句読点も，読みやすさを考えて全面的につけ直した。原文では段落分けがされていないが，内容の切れ目で段落に切り，その多くに〔　〕で小見出しをつけた。文中にある〔　〕は，翻刻者のほどこした注である。原文の表現がおかしいと思われる場合，同じ II 類の「大峯逆峯修行記」や他の四十二宿一覧史料と対照して検討したが，「大峯逆峯修行記」にも脱漏・誤写が見られ，意味を充分に解せなかった個所がある。〈　〉は原文にある注である。

「大峰山記」の翻刻の後に，参考史料として，II 類の抄写本である III 類の史料『大峯山』所載「大峯四十二宿地」のうち，『神変』掲載の「大峰山記」に欠けている第一～第三と第四十一～第四十二の部分を付け加えた。翻刻の要領は上と同じである。第一～第三の部分に関しては，同じ II 類の「大峯逆峯修行記」を翻刻するのが望ましいが，翻刻者の読解能力と時間の制約の問題もあり，断念した。

なお，「大峰山記」の当初のワープロ入力には，駒澤大学大学院生の廣本祥子さんの助けを得た。記して謝意を表したい。

注

1) 小田匡保「大峰の霊地伝承史料とその系譜—秘所一覧と四十二宿一覧を中心に」，山岳修験 4，1988，83～95 頁。
2) 米川千秋編『大峯山』，吉野熊野国立公園協会奈良県支部，1944，148～176 頁。
3) 銭谷武平「大峯奥駈け四二宿—『大峯細見記』から」『大峯こぼれ話』，東方出版，1997，179～193 頁。
4) 成田山仏教図書館では，第 5 号以降のバックナンバーを多く所蔵している。その他，東京大学法学部附属近代日本法制史料センター明治新聞雑誌文庫所蔵分も参考にした（ただし，成田山仏教図書館より欠本が多い）。
5) 「終刊の辞」，神変 8，1909，1 頁。
6) 「本年の本誌」，神変 9，1910，1～4 頁。なお聖役協会の所在地は，京都府宇治郡醍醐村字醍醐 317 番戸と記されているが，第 20 号からは，字醍醐小字上端山 41 番地の菩提寺内に変更されている。
7) 『神変』の創刊や海浦義観については，宮家準『修験道思想の研究』，春秋社，1985，140～154 頁，に詳しい記述がある。生没年は，円覚寺のウェブページによる（2002 年 3 月 11 日アクセス）。http://www.d6.dion.ne.jp/~engakuji/origin.html#label4

8) 「修験乗書籍目録　第八回」，神変 23，1911，26〜29 頁。

9) これについては，次の拙論を参照されたい。小田匡保「大峰の「ナビキ」考」（水津一朗先生退官記念事業会編『人文地理学の視圏』，大明堂，1986），357〜365 頁。

大峰山記

（第三の途中から）

〔吉水院〕

蔵王堂の前，旅籠屋町二丁余り行，東の方へ下る寺を吉水院といふ。是甚だ古き寺なり。本尊は試掌蔵王菩薩といふ。役行者，安禅の蔵王を造らんと欲し，試みに柘楠華（しゃくなげ）を以て是を造られしと。御長（たけ）一尺六寸なり。又智証大師の作不動明王，并に二童子あり。昔し弁慶法師，兵力を此像に祈り，満日に鉄の釘を以て，庭の石に刺す。釘微か頭今にあり。南帝当山御行幸の時，暫時く此寺を行宮とし玉ふ。其時大床を御枕となし玉ふ。御製に，

花にねて　よしや吉野の　よし水の　枕の下に　石ばしる音

文治元年，源義経，大物（だいもつ）の浦より此山に入り，ひそかに当寺を頼み隠れ居玉ふ所に，吉野法師心かわり故，当寺を出て中院谷に隠るといへども，又跡を追ふゆゑ，佐藤忠信防矢し，多武峰へ落玉ふといふ。

〔桜本坊〕

又燈籠ヶ辻を右へ行ば，井光山五台寺桜本坊といふ寺あり。門の内に古松あり。臥龍松と名く。当寺は当山派先達三十六ヶ所の中なり。寺の鎮守井光大明神は，神武天皇，熊野権現の御告にて此山に御幸し玉ふ時，井の内に光る老翁あり。天皇，何者なりと尋玉ふに，国津神と答ふ。後其翁を祭る所なり。抑（そもそも）此桜本坊は，天武天皇の御願寺なり。天皇，此山に即〔御カ〕幸し玉いて，勝手明神に参籠し玉ふ時，箏を弾き玉へば，天女あま降り，袖をかへすゆえ，勝手山を袖振山とも御影山ともいふ。其夜の夢に，満山の桜爛漫たるを御覧し，暁に御簾（みす）の外一株の桜の花盛なるを叡覧ましまして，其彷彿たる事を思召して，役行者に御夢を占しめ玉へば，御願成就と判し奉る。程なく御願ひ満玉ひしかば，彼桜木ありし所に一宇を建て，役行者の二子の内，角仁行者に給り，桜本坊と号すといふ。

〔勝手明神〕

又勝手明神は，大宮・若宮二社にて北向なり。昔しは三社にて，一は吉野山木の神にて，山口の神社是なり。二は吉野山金の神にて，波宝子〔波宝（はほう）カ〕の神社なり。三は吉野山土の神にて，波比売（はひめ）の神社是なり。此内，山口の神は麓へ遷座あり。依て今は両社なり。是愛髪を祝ふ神なり。俗行の者秘歌に，

みな人の　身に勝手なる　願ひをも　あわれみ玉ふ　此神の慈悲

此社に，静御前法楽の舞の装束，義経の鎧などありけるか，正徳年中の火に失ふ。又南帝賀名生（あのう）といふ所へ落させ玉ふ時，此社の前にての御製に，

憑（たのむ）かひ　なきにつけても　誓てし　勝手の神の　名こそをしけれ

御影山は勝手明神の右にあり。袖振山・勝手山みな同名なり。

乙女子が　乙女さひず〔さびす〕も　唐玉を　袂にまきて　乙女さひすも

〔雨師の観音〕

両〔雨〕師夢違の観音を，俗貌〔貘〕の観音ともいふ。是丹生川上の神社なり。観音は本地仏なり。道の傍石〔右カ〕にあり。此所にて南帝行幸の時は雨ふりければ，

此里は　丹生の川原に〔川上〕　ほと近し　祈らば晴よ　五月雨の空

此辺に丹生川あり。一里麓に丹生大明神の祠あり。弘法大師の御筆。此夢違の前にて，俗行の者秘歌。

夢の世に　夢を重ねて　迷ふなよ　只よしあしを　捨る身なれば

〔雲井の桜〕

此先に小坂あり。其上り口にて，右の嶺に見ゆる桜を，雲井の桜といふ。古しへは多くあり

て，雲の如く見えしを，飛鳥井郷〔卿〕の歌に，

御階（みはし）さへ　思ひやられて　同じ名の　雲井に〔の〕花も　みよしのゝ春

〔大将軍社・辰の尾・布引桜〕

又西方に見ゆる高き山を船岡といふ。又大将軍の社，本道の傍にあり。是等は南帝の勅名なりといふ。西の谷を中院谷といふ。山伏隠れ・龍返し抔（など）といふ岩あり。夫（それ）より花矢倉といふ所の上に民家あり。辰の尾といふ。此辺りの道の左右を布引桜といふ。飛鳥井郷〔卿〕の歌に，

布引も　錦と見えて　吉野山　名に越にける　花の一しほ

〔世尊寺・三郎鐘〕

鷲尾山世尊寺は，本尊釈迦如来。此尊は欽明天皇四年，河内国芽〔茅〕渟海（ちぬのうみ）に光りものあり。溝部直，勅を奉りて海に入て，樟木（くすのき）を得て是を奏す。其樟木にて作り奉る仏像なり。日本木像の初と，日本紀に見ゆ。当寺に鐘あり。天下に三つの鐘といふ。所謂海太郎・奈良次郎・吉野三郎といふ。鐘の銘に，保延五年，平朝臣忠盛とあり。鷲尾鐘の所にて，俗行の者秘歌に，

暁の　鐘に迷ひの　夢さめて　御法もふかく　鷲の尾の鐘

〔水分神社〕

世尊寺の上，子守三社は，中祠本地は阿弥陀，左は地蔵尊，右ば〔は〕十一面観世音なり。社は西向に建つ。此神は吉野の峯山川の神にて，吉野水分神社是なり。豊臣秀頼再興ありしなり。草根集（そうこんしゅう）に，

吹払へ　山は吉野の　秋霧に　子守勝手も見えぬ神風

枕草紙〔子〕に経家の歌に，

もろ恋に　今はなるらん　御子守の　神のしるしは　ありとこそ聞く〔け〕

又衣笠内大臣の歌に，

いかにして　心の末を　顕はさん　掛て誓し　御子守の神

俗行の者，此所にて秘歌に，

親はたゞ　子守の山に　月すみて　浮雲もなき　身こそ嬉しき

〔高城山〕

夫より牛頭天皇の社へ参り，右の方に高城（たかぎ）山あり。万葉集に，

みよしのゝ　高城の山に　白雲は　いゆきはゝかり　たな引にけり

又拾玉集（しゅうぎょくしゅう）に，

高城山〔みね〕　ふかき谷こそ　あわれなれ　さならぬ人は　音信〔おとづれ〕もせず

〔遙の谷・躑躅が岡〕

遙の谷は，高木〔城〕山の前，深き谷をいふ。此辺の道を車停めと名づく。南帝行幸の時，御車を立させ玉ふ地なり。左右ともに絶景，言語にのべ難し。和歌の浦まで眼下に見ゆ。此道の左りの山谷を躑躅（つつじ）が岡といふ。飛鳥井大納言の歌に，

高ねより　見れば遙の　谷の戸も　花にとぢたる　みよしのゝ山

〔岩倉〕

又岩倉といふは，谷向ひ右の方に見ゆ。是も南帝の勅にて，都の平安に准じ，四方に岩倉を置く。今は此谷のみ名残れり。

第四　鳥居之宿

〔金精大明神〕

是麓の銅の鳥居の事に非ず。二の鳥居金精大明神の前なり。今の化多明神・姫明神は，大峯七十五靡の守護，金峯の地主なり。此神は吉野嶽黄金の精霊にて，神名帳（じんみょうちょう）に，金峯神社其本体素盞烏〔嗚〕尊なり。宣化天皇二年丁巳八月九日，金精神並に埴宝児神〔埴安彦神カ〕，埴日女神〔埴安姫神カ〕と共に出現と云々。此山黄金極めて多しといへとも，取ることあたはず。然るに盗賊ありて盗取，箔

に打ければ，其箔に金の字顕れ，其罪露顕すと，宇治拾遺に見ゆ。此所より奥の院まで下乗なり。

〔蹴抜の塔〕

又左へ坂を下り行当り，隠れ家といふ所に蹴抜の塔あり。飛騨の内匠か建しとにふ。義経此寺に隠れしに，吉野法師跡を追ければ，馬に乗りながら谷へ飛入し時，此塔を蹴抜しといふ。此所にて俗行の者秘歌。

吉野なる　深山（みやま）の奥の　隠れ堂
本来空の　住家なりける

〔青根が峰〕

青禰か峯，塔の南の方の高き山なり。此下の谷に義経馬を捨られし所，龍が谷といふ。義経竹をたわめ，向ふへ渡られし所あり。万葉集に，

深よし野の　青ねか峯の　苔むしろ　誰か織けん　竪横なしに
吉野川　岩瀬の波に　よる花や　青ねか峯に　澄〔消〕る白雲

〔安禅寺〕

夫より奥の院は飯高山安禅寺。本尊は丈六の蔵王権現。是役行者，柘楠華を以て作る。左に役行者并ニ二鬼の像御自作。又右に役行者の悲母如意尼の像あり。俗行の者，此所にて秘歌に，

楽しみの　心のうちは　安禅寺　菩提の里に　入相の鐘

〔四方正面堂〕

四方正面堂は，安禅寺の奥の院なり。寺より三丁斗り。本尊は観世音，不動・愛深〔染〕・地蔵を安置す。其傍に蔵王堂あり。俗行の者，此所にて秘歌に，

愛染の　弓矢に向ふ　怨敵も　大悲の道にみよしのゝ奥

〔苔清水〕

苔清水は，四方堂の西北の方，細道の山岨を二丁程行て，苔清水と彫たる石あり。其前の清水，是なり。昔し西行法師，住玉ふ所なり。山家集に，

浅くとも　よしや又汲　人もあらし　我に事たる　山の井の水

〔西行庵〕

苔清水より一丁斗り左りの方，芦原の中に小庵あり。是西行法師のいほりなり。山家集に，

入しより〔よし野山〕　やかて出しと　思ふ身を　花ちりなはと　人や待らん

是までは遊歴の者も独歩す。是より奥山上へは，先達なくては参詣なり難し。

〔影向の弁財天〕

安禅寺より三丁許り元の道へ下れば，小社あり。是影向（ようごう）の弁財天といふ。尊師聖宝理源大師，大峯中興の時，虚空に声ありて，尊師の御身は我是を守護すと云々。依て満願の後，尊師自ら一刀三礼（さんらい）の弁財天を彫刻し，此社に安置あり。今に霊験あらたなり。

〔鳥住鳳閣寺〕

此社の脇より細き道あり。是鳥栖〔住〕（とりすみ）の道なり。鳥栖〔住〕村百螺山鳳閣寺は，理源大師練行の霊場なり。本堂は，理源大師大峯中興の節，修験の御影にて御自作なり。当寺より後の山を登ること十余丁に，尊師の御廟あり。又宝篋塔あり。銘に承平二年建と印せり。尊師は延喜九年七月六日，深草普明寺に於て化を示す。或は又当寺に於て同時に遷化と云々。何れ正身（しょうじん）なるか不可思議なり。当寺二祖貞崇僧都は尊師の弟子にて，宮掖（きゅうえき）に侍りて，稲荷明神と談話し玉ふといへり。僧都示寂（じじゃく）は天慶七年七月二十六日なり。旧記に曰く，尊師の御廟は深草貞観寺の傍にあり。又門弟衆骨を金箱に入れ，金峯山鳥栖寺に安置すともあり。若（もし）是両所に置るや。懐中抄に，

深ければ　声も聞へぬ〔ず〕　鳥すみのやどりは山の　名にこそ〔名にぞ〕ありけれ〔る〕

（以上第 5 号掲載分）

〔蜻蛉の滝〕

又安禅寺より直に行けば，大峯天上越，左へ行けば川上岩屋詣での道なり。其道筋に青折が嶽見ゆる。青折の下より一里に蜻蛉が滝あり。俗に清明ヶ滝といふ。此滝は，岩間より漲り落ること三十間許り。上に又一重の滝あり。滝口の広さ一丈五六尺許り。此滝は昔しは玉緒の滝といふ。雑和元集に，応神天皇の御製に，

なかき代の　尽せぬ数の　白糸に　貫きかゝる　玉の緒の滝

〔秋津の小野〕

又此下に陽炎の小野あり。又形ち〔あきつカ〕の小野ともいふ。万葉集に，

深吉野の　蜻（あきつ）の小野に　刈葭の思ひ乱れて　ぬるよしそな〔多〕き

本名は秋津の小野なり。雄略天皇四年，吉野に行幸ありし時，天皇を虻蚊さしゝを，蜻蛉来て，虻を喰て飛去る。天皇悦び，口号（くちずさ）み給ふ。

上略　しゝまつと　わがいませは　さゐまつと　わがたゝせは　たくふう〔ら〕〈竹原〉に　あむ〈虻〉かきつきつ　そのあむを　あきつ〈蜻蛉〉はやくひ　はむふしもおほきみをまつらふ　下略

新後撰集に，

しられしを〔じな〕　霞にこめて　陽炎のをのゝ草葉の〔若草〕　下にもゆとも

〔琵琶山・音無川・仙龍寺〕

滝の上の山を琵琶山といひ，滝の流れを音無川といふ。此川，一月の内，上十五日涸渇し，下十五日盈溢す。奇異なる所なり。夫より三丁許りに寺あり。仙龍寺と号す。前に弁財天の堂あり。又西郷〔西河カ〕の奥に村民あり。義経落行隠れ給ひし所といふ。青江国次の太刀，今にあり。

〔大滝〕

又大滝村といふに大滝あり。大石流れに峙（そばだ）ち，碧水漲り落る。

〔釈迦の岩屋〕

是より川上柏木の岩屋迄，九箇の民村あり。大滝より寺尾へ一里。次に左右〔左古カ，迫〕へ半里。次に人知（ひとじ）へ半里。次に井登〔井戸〕へ一里。次に白川へ一里。

此所の東の谷間に釈迦の窟あり。岩をつたひ登り，窟中に入る。釈迦如来霊山説法の像等あり。真に霊窟なり。

〔菊の岩屋〕

白川より和田へ十丁。次に上田古（こうだこ）へ五丁。次に柏木へ五丁。此所に菊の岩屋あり。村より三丁許り巽の方なり。窟の口，広きこと四尺許り。窟内へ入ること五間許り過て，岩の端に綱を付て下ること三間許り。嶮きこと壁の如し。心を忽（ゆるがせ）にすべからず。漸く平地に下り着て，広きこと二丈許り。窟中菊爛漫として天工なり。役行者雲入の像等あり。実に奇異の所なり。次に御座の渡し，岩屋より五丁許り北なり。

〔不動の岩屋〕

不動の岩屋は，渡しより六丁許り上なり。川を越し，嶮岩を登ること五間許り。口の広さ，竪六尺横二丈許り。内に入ること三十間余。岩壁を下ること一丈余。綱を付て下るなり。左に滝あり。高さ三丈許り。冷水漲り落，窟内雷鳴の如し。右に行くこと十丈許り。一つの淵あり。彼流れの末なり。夫より奥一町許りに又深淵あり。広さ二丈余。傍に不動明王の像あり。高さ五尺許り。古老の伝へいふ。更に行ふ者なしと。又岩屋の口より二十五間許り入り，右に一つの岩穴あり。奥へ入ること五丈許り。是より奥へ入るべからず。至る処を知らずといふ。

〔聖天の岩屋〕

又聖天の岩屋は，不動の岩屋より半丁許り下川辺なり。口の広さ四方丈余。窟前に深淵あり。容易に行き難し。窟の口二つあり。左りの口是なり。内へ入ること二十間余。聖天の像あり。前に池あり。冷水盈満す。

右四箇所の秘所は霊窟にして，随分苦修の異境なり。精勤して，放逸せしむることなかれ。不信の者は心魂持ち難し。実に是神仙の境界なり。

〔川上地蔵〕

河上地蔵尊といふは，神谷〔神之谷〕（こうのたに）村にあり。金剛寺と号す。役行者大峯にて御長一尺二寸の閻浮壇〔檀〕金（えんぶだんごん）の地蔵菩薩の像を感得し給ひ，大峯より此所へ投げ給ふ故，擲寺（なげでら）と号す。今は俗中寺（なかでら）と誤り唱ふ。彼尊は秘して開かず。別に長さ五尺の地蔵尊を彫刻して安置す。

〔国栖奏〕

神谷より大滝まで帰り，大滝より国栖（くず）へ一里あり。古は国樔と書。昔し此所に翁あり。応神天皇十九年十月朔日，吉野の宮に行幸の時，国栖の翁一夜酒の三寸を奉りて歌を謡ふ。

かしのふ〈所名〉に　よこす〈横臼〉を　つく〈造〉り　よこす〈横臼〉に　かめ〈醸〉る　をほみき〈御酒〉　うま〈甘〉らに　きこしもち〈聞食〉をゆ〔せ〕まろ〈飯丸〉かち〈父〉

其後国栖土毛を奉ること，日本紀に見ゆ。

又天武天皇，吉野の岩屋に隠れ給ふ時，国栖参りて，粟の飯にうくひを奉る。後帝位に登り給ふて，翁を召て，元日の節会に御衣を給ひて，五節豊明（ごせちとよのあかり）には笛を吹しめ給ふ。今に国栖の奏といふこと残れり。今に其子孫の者，権守衆とて此所にあり。万葉集に，

国栖等か　若〔春〕菜つむらん　司馬の野は〔の〕　しばしば君を　思ふこのころ

〔司馬の野〕

此司馬野といふ所，此辺にあり。夏箕川の向ひなり。西河より夏箕〔菜摘〕へ一里。此間江仏が峯といふ所あり。其峯の北の方に，蝉の滝といふあり。万葉集に，

大滝を　過てなつみに　そひていく〔て〕清き河原〔川瀬〕を　見るかさやけき

吉野なる　夏箕の川の　河よとに　鴨〔鴨〕そ鳴なる　山かげにして

〔宮滝・岩飛・柴橋〕

宮滝は，夏箕より三丁程行ば，両峯せばき所，吉野川せかれて急に落る所を宮滝といふ。其此方に屏風岩とて，高きこと十五六間あり。岩飛とて，村人此岩の上より水底に飛入るなり。見るも怖しき業なり。是大峯参詣の者の代垢離といふ。又屏風岩に掛し柴の橋あり。是は，南帝の后宮（きさいのみや）を，篠塚伊賀守が娘伊賀の局と申が負ひ奉り渡し奉る旧跡なり。夏箕川は，宮滝の下の流なり。川の両峯躑躅多し。御園（みその）は吉野山に続く所，南帝の御花畑の跡なり。此末吉野川にそひて妹脊〔背〕山あり。又柴橋より象（きさ）の小川に出る。其傍に桜木の宮あり。是を過て如意輪谷へ出る。

〔如意輪寺・後醍醐天皇陵〕

塩〔塔〕尾山如意輪寺は，本尊如意輪観世音，役行者の作なり。試の蔵王権現あり。則龕の扉に，吉野より熊野迄の山の絵，又南帝の御震〔宸〕翰・御〔御製カ〕，色紙形に遊し給ふ。

峭崛月前為二教主一　金峯嵐底現ス二蔵王一

班荊禅客安居ノ砌リ　緇素群焉満ツ二願望ヲ一

慈風扇テレ境四流渇ス　惑霧晴テレ心ニ六度差フ

碧樹集テレ雲飛フ二鷲峯一ニ　黄金敷キレ地掣ナル二龍華ニ一

風月澄スレ心ニ文道ノ祖　火雷宥ムレ忿ヲ法陀ノ尊

日蔵聖威瑞夢ノ処　大政天為教海繁シ

両山梯峻古仙ノ跡　四海船浮フ権化ノ神

行積僧祇鑑ミ二末世ヲ一　威政鬼類縛ス二其身ヲ一(一)

又如意輪塔の扉とてあり。今塔はなし。火に失たり。其扉に，

帰らしと　かねて思へは　梓弓　なき数にいる　名をそとゝむる

橘〔楠〕正行

と書しを，後人失はんことを思ひて彫しにや。

又此寺の後に，円丘高く築て，世に憐れなる陵なり。是南帝の御陵廟なり。寺に日蔵上人の鉄鉢・袈裟等もあり。其外，南帝御物等残りあり。種々拝見し，吉野宿寺へ帰る。

〔吉野入堂次第〕

吉野入堂次第，発心門，蔵王堂，天満，佐桃〔抛〕，勝手，八王子，上宮，牛頭，金精，宝塔。

〔吉野八社明神〕

又吉野八大神といふことあり。金精一社，子守三社，牛頭一社，佐桃〔抛〕一社，勝手二社。是等は先達に問て，委く聞くべし。

（以上第 6 号掲載分）

第五　青篠之宿

〔青篠の宿〕

吉野安禅寺を出て，天井越といふ道を登り，鈴塚の向へ中番〔香カ〕場との登り間に金剛童子在す。これ青篠の宿なり。

〔守屋〕

此次に守屋といふ所に茶店あり。此所に金剛童子在す。是も青篠の行所なり。

第六　薊菜之宿

〔薊菜の宿〕

此宿を一人の宿ともいふ。守屋の茶屋より登りて，絶頂を薊菜（あざみ）嶽の宿といふ。此所は昔し，了算上人といふ僧，鬼神を使ふて，籠り居し所といふ。

〔足摺〕

又足摺といふ所に金剛童子在す。俗説には，足摺の岩といふは，役行者の悲母大峰に登らんと来り玉ふといへども，障碍（しょうがい，しょうげ）ありて，此所より登り玉ふこと能はずして，哀慟（あいどう）の足跡といふなれども，是は非なり。或書に，都良吽仙尼の足ずりなりといふ。

〔百町・象鼻・大天井・九穴〕

此辺より百町といふ。嶮岨なり。天井・象鼻といふ所にて，俗行の者秘歌に，

白象に　のりの始や　花足代　仏の願ひ満る身なれば

大天井といふ所に金剛童子在す。修行の者秘歌に，

天津風　雲井遙に　詠（なが）むれば　三世諸仏の　浄土なるらん

又九穴といふ所に蔵王権現在す。此所にて俗行の者秘歌に，

九穴より　呼吸の風や　かりの身の　不浄をさるは　岩はしの水

第七　寺及之宿

〔御番石・寺及の宿・蛇原〕

御番石を下り，谷渡りあり。此所の茶店より登り，巌石坂の上に金剛童子在す。此所寺及の宿なり。一名を二人の宿といふ。此下三町斗りを蛇原（じゃばら）といふ。

第八　今及之宿

〔今及の宿・今宿〕

登り行きて宿あり。一名を三人の宿ともいふ。此宿を今宿といふは誤りなり。今宿といふは，天の川より高瀬山を御山（みせん）へ登るに如来池といふ所に今宿といふ宿あり。この地名と取違しなり。

〔洞辻〕

又洞辻といふ茶店あり。此所に金剛童子在す。

第九　鞍懸之宿

〔鞍懸の宿〕

一名を四人宿ともいふ。此宿は，小鞍掛といふ上に平地あり。則ち鞍懸の宿地なり。此所にも金剛童子在す。右登り行て，獅子鼻といふ所あり。猪鼻といふは誤り也。此所にて，俗行の者秘歌に，

無明なる　獅子に乗り得て　法性（ほっ

しょう）の　道を尋て　入るそ嬉しき

〔鐘掛〕

夫より鐘掛行場の巌の下を，度衆は右の路に登り，新客は左の路に行て，この巌面を行ふべし。尤も大事の所なり。俗説に，昔し役行者，山上本堂にある所の釣鐘を荷負して，此巌壁を攀躋（よじのぼり）玉ふといふ。其鐘の銘に曰く，遠江国佐野郡原田郷長福寺鐘，天慶六年七月二日，又永治二年六月二日，念仏者定宗慈修房十一度ともあり。其由縁詳ならず。此所にて，或る修行者一句。

不レ知ラ祖師ノ本行道　空ク認二金峰一作二道場一

又鐘掛にて，俗行の者秘歌に，

鐘掛と　問ふて尋て　来て見れば　九穴の蔵王　下にこそ見れ

〔お亀石・西の覗き〕

鐘かけより西へ行て，右の方へ入り，西覗といふ行場あり。行ふべし。此間，亀石といふ所に，路の中に石あり。俗行の者秘歌に，

亀石を　踏な障るな　杖つくな　まはりて通ふれ　新旅の客

夫より西の覗にて，俗行の者秘歌に，

わけ登る　雲の掛橋　遠近の　心の濁りすめる谷川

〔妙覚門〕

又妙覚門といふ所にて，或修行者一句。

明暗風寒枝葉ノ扉　百年同ク観抖擻（とそう）ノ雪

又俗行の者秘歌に，

峰つたふ　己心（こしん）の風の　清ければ　本の仏や　等覚の門

〔山上〕

抑此三乗の嶽と申は，山勢高峻にして，霜雪厳洹たり。山頭に浄刹あり。巍々（ぎぎ）玲瓏（れいろう）たる梵閣なり。本尊蔵王権現の御丈并に三所権現の本地等は，吉野に在すが如し。御自作の役行者前に二鬼あり。御長三尺五寸といふ。神祇秘鈔に曰く，山上金剛蔵王は天照大神の化現（けげん）なり。密教擁護，利益衆生の為に出世し玉ふ云々。

又入堂の次第は，先（まず）龍の口にて僧俗共に垢離をとるなり。此所に金の蔵王権現二体在す。是を拝し，俗行の者秘歌に，

手に結ぶ　鑁（ばん）字の水の　清けれは　なほいさぎよき　法の峰かな

〔後入堂〕

夫より先，後入堂を行ふべし。□り石通り石あり。過行て，役行者護摩を修し玉ふ岩屋あり。上に大なる石あり。古記に曰く，行者の呪力を鑑知せんと，天より行者の上へ此石を堕するを，行者契印して，之を遮り止む云々。此所の前後に，伊勢・熊野・高野・吉野等の伏拝所あり。又不動尊の護摩場といふ所あり。

又飛石といふ所にて，俗行の者秘歌に，

煩悩の　垢を除て　身は軽し　是ぞ仏の国へ飛石

又東の覗といふ所にて，俗行の者秘歌に，

覗く身は　菩提の道へ　引綱の　雲間や花の　台（うてな）なるらん

又行道石，一名平等石。此所にて，俗行の者秘歌に，

行道石　周りて見れば　安居滝の　捨る命は　不動倶利伽羅

又苔の蔵王権現あり。其所に銭坪といふ石あり。賽銭を入る。

夫より行者秘水あり。身に洒（そそ）ぎ，口に嗽（すす）ぎて呑べし。

又鏡石といふ所にて，俗行の者秘歌に，

生れ来し　姿を直に　鏡石　草木も漏れず　成仏の庭

此の行場総て，蟻の門（と）渡といふ。此眼下の岩屋に不動明王在す。山家集に，西行法師の大峰の秘所，数多ありとかや。人更に語り伝へず。さればまして知らず。蟻の門渡りといふ所にて，

篠深き〔み〕　霧こす岫（くき）を　朝たち

て　なひき煩ふ　蟻の門渡り

又山家集に西行法師の曰く，平等院行存〔尊〕名かゝれたる率都婆に，紅葉の散かゝりけるを見て，花より外にとありけん人ぞかしと，憐れに覚えて詠る，

哀れとも〔て〕　花見し嶺に　名をとめて紅葉ぞ今日は　ともに散ける

夫より本堂妙覚門にて，或修行者一句。

蔵王堂前凌テレ空ヲ麗ク　新ニ開ク万花満テレ地ニ香シ

此所にて，俗行の者秘歌に，

登り来て　花の盛りを　詠れば　今も仏の世にいますなり

次に本堂へ入て，至心随喜の心を生ずべし。又修行者一句。

吉野霧ハ晴テ絶シニ塵埃ヲ一　三乗雲ハ散知ルニ本然ヲ一

此所にて，俗行の者秘歌に，

いにしへの　仏の教へ　盛りなり　行者の誓ひ　深き山の端

〔橋立岩・宿坊〕

本堂の三面は巨巖多くして，西に涌出嶽といふに橋立岩あり。是は昔し役行者，金剛山より此所へ岩橋を掛べきとの橋台なり。北に望て僧坊六区あり。是山上安居の行者の宿寺あり。東は蟻の門渡りなり。南方は峰続て，小篠のなひきなり。

秘して曰く，此所の大湯屋の上に，役小角所持の御経あり。今分明に是を拝す。

金葉集に曰く，僧正行存〔尊〕の歌に，大峰にて，

もろともに　哀れと思ひ〔へ〕　山桜　花より外に　知る人もなし

又玉葉集に，僧正教範，大峰を修行し侍りけるに，

時雨ふる　外山（とやま）のすゑは　晴やらで　雲のうへ行　峰の月影

第十　化和拝之宿

〔化和拝の宿〕

山上より小篠の方へ四町計り下りて，右の方の高き所に金剛童子在す。其所の平地，是宿地なり。俗行の者秘歌に，

六根の　客も夢をや　覚すらん　仮りの宿りに　何とゞむべき

此所は，順逆両峰の先達，小篠入峰の節，大宿一人，末座先達一人残りて，此所より笈を負ひ，大松明にて駈入る。其翌日小篠にて大宿座の護摩あり。依て，是迄七度半の使僧にて，大宿の入堂を進め申すなり。其外，醍醐・聖護両門主入峰の節，種々の古例ありといへども，今此宿退転ゆゑ，小篠の丹生寺宿にて，大宿座等の儀式を勤む。

又閼伽滝といふ所にて，修行者一句。

阿伽滝水随テレ地ニ在　三乗明月応シテレ物ニ現ス

又此所にて，俗行の者秘歌に，

胎内を　くゞりて滝に　うたるれば　今は鑁字に　垢をこそぬく

（以上第 7 号掲載分）

第十一　小篠の宿

〔小篠の宿〕

此小篠の宿は特別秘所なり。聖宝理源大師，大峯中興の節，此所に於て，神変大菩薩の引導にて，龍樹大士より慧印三昧耶秘密の法を伝授せし所なり。依て，此所は誠に九品の浄刹なり。則ち当山の密場として，本堂・尊師堂・金剛剣光童子社，其外諸先達の宿建て連ね，順逆の先達，毎年此所に留足し，天下泰平・国土安穏の柴燈大護摩あり。修行者の一句。

白雲深処乾坤別　負笈乍来塵外客

小篠に於て入堂の次第。先大黒天・多聞天・歓喜天・弁財天・金剛童子・護摩壇場・本堂・祖師堂・求聞持・両界大日・稲蔵・三乗・両所の伏拝等なり。俗行の者，大黒窟にて秘歌。

福徳は　直の心の　名なりける　欲には出

ぬ　大こくの槌

又護摩の炉壇にて，

遠近の　人や菩提の　数積て　猶たのみある　正覚の場

本堂に参詣して，

本来の　阿字の都や　小篠堂　三世の仏願ひ三つの座

又理源大師の宝前にて，

濁る世の　衆生を救ふ　から衣　本地如意輪　観音の慈悲

又某門主の，

皇（すめら）きの　直なる道を　出る日の光りさやけき　法の教へや

或修行者，当所にて一句。

洞川朝ニ吐ク一片ノ雲　小篠夜ヽ戴ク孤輪ノ月

山家集に西行法師の，小篠の泊りと申所にて露しげゝれば，

分きつる　小篠の露に　そほちつゝ　ほしそ悩（わずら）ふ　墨染の袖

修俗ともに此所に暫く逗留し，所々の秘所へ参詣すべし。

〔阿弥陀ヶ岳〕

先づ其秘所と申は，一日卒都婆を持て，阿弥陀ヶ嶽へ参るべし。

〔洞川〕

又一日，原下りと称して，洞川（どろがわ）より天の河へ泊りがけに参るべし。

先づ洞籠か岩屋を行ふべし。洞川村より六町計り山上の方，右の川向へにあり。岩窟の中広くして，奥へ遠し。色々の拝所あり。奥に龍池あり。人礫を投ずれば，窟内鳴動す。慎むべし。この池水は，洞川龍泉寺の境内，龍の口といふ所へ出るとなり。理源大師，毒蛇を追ふて，此窟に至て，遂に之を退治し玉ふといふ。窟内より蛇骨出る。修俗之を得て疵薬とするに，平愈甚だ妙なりといふ。

夫より龍泉寺へ参るべし。此所は村より川向にして，誠に奇異の霊地なり。本堂は弥勒仏にて，行基菩薩の作。護摩堂の不動尊は，理源大師の作。蔵王権現は役行者の作。此寺の額，龍泉寺と書たるは，弘法大師の筆。此所は五十六億七千万歳の後，慈尊出世の時，日本一の道場となるべき所と申なり。又境内に龍池あり。冷泉涌出す。岩間は八大龍王現れ玉ふ所といふ。種々の宝物あり。開帳を願ひ，至心に祈念すべし。此所にて修行者一句。

秘得龍泉水裏徳　計知十界一時清

〔天川〕

夫より天の川へ参るべし。此間に都良香・業平等，隠れ家の跡ありといふ。尋ぬべし。

天の河社は南向なり。本尊弁財天は，役行者大峯修行の節，深山（みせん）龍池に於て霊験を祈るに，冷泉の内に天女出現あり。円光を輝し，十方法界の秘事を伝へ玉ふ。即ち其姿を作り，安置し玉ふ。今の尊像是なり。其後当所に籠り玉ふ時，夜陰に琵琶のひゞきありて，人心の迷雲を払ふ故に，此所に移して，深山の里宮となし玉ふに依て，琵琶山白飯寺と号す。其後，天武天皇臨幸あつて，社壇を営作なし玉ふ。

又弘法大師，此所に千日籠り玉ふ時，日輪の中へ天女顕れ玉ふ。依て満願の日，弁天を彫刻し玉ふ。今の日輪の御影，是なり。

宝殿の左右，行者の真影二軀あり。一体は理源大師三十二歳の作，一体は役行者の自作なり。理源大師自作の影像あり。

先達并修験俗行の者，通夜し法楽読経。終て，神楽・湯立・比々久米舞あり。次に天女開帳。宝物は，五筆複巻の法華，玄宗皇帝の宸翰，最勝王経，中将法尼，蓮糸を以て縫たる唯識三十頌（じゅ），其外宝物霊剣等あり。又諸修行者，馴子舞といふことあり。翌日小篠へ帰山す。

長秋詠藻（ちょうしゅうえいそう）に，藤原俊成卿天の川にて，

吉野山　花や散らん　天（あま）の川　雲のつゝみを　くずす白浪

又此所にて，修行者一句。

天川水流テ如レ織レ文　金峯風響テ似レ操レ琴

（以上第 8 号掲載分）

〔稲村岳〕

又一日，小篠より稲倉嶽へ参るへし。路三里許り。稲蔵とも書く。俗には稲邑（いなむら）といふ。天の川荘，洞川の南に当り，巉巖（ざんがん）にして奇観なり。朝鮮嵩西南の山脈に相連り，樹木鬱蒼（うっそう）たり。早旦（そうたん）に是を臨めば，山色鮮かにして，七面山・深山（みせん）等は西，舟川（ふなのかわ）荘篠原村の東にあり。諸峰相連り，真に蓮花の如し。

其参詣の路は，山上蔵王堂の前より行べし。此道の辺りに御花畑といふ所あり。実に仙人も遊び，天女も来降（らいごう）あらんかと思ふ。其景色，言語に述べ難し。夫より多輪へ下り，段々登るべし。尤嶮岨なり。嶺上に宝殿あり。金剛界大日如来黄金の像を安置す。長一尺二寸斗り。不徳の先達，此扉を開けば，大雨震動す。慎むべし。又一振の宝剣納めあり。此所は昔し守屋大臣の廟なりといふ。聖徳太子は，守屋大臣の此所に隠れ居しを退治し玉ふといふ。

〔神童子〕

又一日，神童子（じんどうじ）へ参詣すべし。小篠より五十丁許り先きに若〔般若カ〕の岩屋。一名普賢の窟ともいふ。次に不動の滝あり。千手の滝あり。馬頭観音の滝あり。又針峰といふ所に蔵王権現在す。此所は昔し，役行者初て禅鬼を随へ玉へし所なり。其時行者，禅鬼に比々久米の舞をまわせ見玉ふといふ。是，天の川等の比々久米舞の初めなりとかや。

〔阿古滝〕

又一日，安居（あこ）滝へ参詣すべし。小篠より二里余。

宿を出て一丁許り山上の方，右に細道あり。是を下ること五十丁許りに，瑪瑙の窟あり。俗に胎内くゞりといふ。岩屋の内，広きこと十丈許り。中に役行者の護摩壇あり。瑪瑙の珠数等，岩に付てあり。色々殊勝の事ともなり。傍に龍池あり。滝二重あり。上は薬師の滝，下は布引の滝。

夫より半里計り下り，安居滝あり。此滝にて役行者の小児，身を投げ玉ふといふ。其時の歌とて，

あこ滝や　捨る命は　おしからず　あかて別れし　父ぞ恋しき

夫より右へ少し行，下ること三丁許りに，三鈷の岩屋あり。此所にて役行者，弘法大師，理源大師等護摩を修し玉ふといふ炉壇あり。其時の三鈷，今にあり。同所に三古の滝あり。高さ八九間なり。又外に，大師如法経をなし玉ふといふ窟あり。又阿弥陀の窟あり。修行者一句。

安居ノ定水徹底円カナリ　清流何処付二塵埃一

〔笙の岩屋〕

又一日，笙の岩屋へ参るべし。小篠より三里といふ。

宿を出て奥駈の道を行き，小普賢・大普賢との間の路より十間許りに，役行者の経箱岩あり。石の半腹に穴あり。

此所の本道を行て，左の方へ嶮岩を過て，左右に道あり。右へ下れは，倶利迦羅不動の岩あり。高きこと丈余。左へ行けば，壱里許りに鷲の窟あり。其次は笙の窟なり。金剛虚空童子在す。横竪数十丈。一つの小殿あり。金銅の不動尊在す。長一尺五寸。古記には，不動尊二軀，一体は役行者の作，一体は弘法大師の作とあり。昔し日蔵上人，此窟に於て蔵王菩薩に謁し，冥府に赴くと云々。又外に，日光・月光出現の窟二つあり。外に朝日の窟あり。ともに国見山の腹なり。尋ぬべし。此所にて修行者一句。

馴レ華吉野晨　伴レ月笙窟夕

此所古歌多し。新古今集に，日蔵上人の歌に，御嶽の笙の岩屋に籠りてよめる，

寂寞の　苔の岩戸の　雫〔しづ〕けきに涙の雨の　ふらぬ日そなき

金葉集に，僧正行存〔尊〕，大峰の笙の岩屋にてよめる，

草の庵（いお）を　なに露けしと　思ひけん　もらぬ窟も　袖はぬれけり

千載集に，大僧正覚忠，大峰を通り侍ける時，笙の岩屋といふ所にてよめる，

宿りする　岩屋の床の　苔莚　幾夜になりぬ　い〔ね〕こそね〔い〕られぬ〔ね〕

風雅集に，静仁法親王，笙の窟に籠り，よみ侍りける，

くるとあくと　露けき苺〔こけ〕の　袂かな　もらぬ窟の　名をはたのまし

玉葉集に，普光園入道前関白左大臣，

いかばかり　時雨の〔に〕袖を〔の〕　しほるらん　もらぬ窟の　昔しこひつゝ

新後拾遺に，前大僧正良栄，大峰笙の岩屋にて蔦の紅葉を見，読侍る，

心とや　色にや出る〔色にいづ〕らん　雨露も　もらぬ岩屋の　蔦のもみし〔ぢ〕ば

山家集に，西行法師，御嶽より笙の岩屋にまひりけるに，もらぬ岩屋とありけるを思ひ出して，

今宵こそ　哀も〔み〕あつき　心地して　嵐の音を　よそに聞かな〔つれ〕

（以上第 9 号掲載分）

第十二　脇之宿

〔脇の宿〕

小篠を起て，行者堂の左りを段々登り，阿弥陀の森といふ所を越行て，龍ヶ嶽といふ所にて，先達に菊の岩屋を尋ね参るべし。龍ヶ嶽を下り，金剛剣光童子在す所，即ち脇の宿なり。今に退転せず。蔵王権現・役行者・理源大師を安置す。此所は大篠とて，篠の宿の旧跡にて，分て極秘のこと多し。此宿より前に，左の方へ路あり。是川上道なり。又其前に道あり。樵夫途なり。混迷すべからず。山家集に，西行法師の歌に，大峰の笹の宿にて，

庵さす　草の枕に　伴なひて　篠の露にも宿る月哉

菊の岩屋へ参るには，脇の宿の閼伽井の元を左へ，山の腰を三町程行て岩窟あり。此所に菊の花あり。声をも高くすべからず。是仙人のおしみの菊といふ。古記にも，脇の宿の東の谷に菊あり。白房の大輪なるが重りて咲。逆峰の時，是を取りて，諸神諸仏に供養すといふ。

脇の宿にて，修行者一句。

大篠峰頭絶二苦行一　三乗堂前華如レ雪

俗行の者，此所にて秘歌。

立わかれ　小篠の露に　夜をこめて　脇の宿には　残る月影

脇の宿を過て，大なる岩あり。金剛童子在す。此所，霊山浄土とも，又は明王の嶽ともいふなり。

第十三　普賢之宿

〔普賢岳〕

普賢の嶽にあり。一名を紫雲山ともいふ。笙の窟も此嶽なり。宿地は笙の窟の辺りなり。又経岩の近所ともいふ。俗行の者秘歌に，

峰遠し　伏おかみ行　谷風に　普賢の誓ひ　頼母敷かな

昔し治承年中に，普賢の嶽より蔵王堂へ大なる光りさしたることあり。依て金峰の僧侶等大に怪しみて，其光りを伝へ，普賢の嶽に至り見るに，往昔の縁起の文に，役行者法華般若等の御経を石櫃に入れ，普賢の嶽に納め玉ふとある所の岩は，大地震にや嶽崩れて，御経箱地に落て在すを，僧侶見付て，此御経より光り放ちけるにやと持帰り，蔵王堂に安置し奉る所に，其後幾ばくならぬに，蔵王堂へ雷電落掛り，半時計り黒雲覆ふて，暗夜の如し。雲晴て後，堂内に安置する彼経箱なし。定めて龍神執り奉りて，天にあがり玉ふか。不思議の事なりと伝ふ。普賢嶽の御経箱の跡，四方よりゑ〔彫〕りたる，現今に至るまで其儘にてあり。修行者，是を拝

するなり。

第十四　児泊之宿

〔児泊り〕

普賢宿より此宿の間，色々の所あり。先地蔵が嶽。又役行者，鬼神を狩出し玉ふ所あり。又薩摩転げ・内証落し等，難所なり。宿地は金剛童子の前なり。世俗，此辺を大普賢といふは誤りなり。転法輪が嶽といふ。此嶽を北へ下れば，北斗七星といふ所あり。龍の爪掛，屏風の横駈，七ッ池といふ難所なり。七ッ池は今なし。岩の谷なり。昔し大なる池にて，大蛇住けるを，理源大師逆峰修行の節，退治し玉ふといふ。此辺惣じて国見が嶽といふ。

第十五　行者帰之宿

〔行者帰り〕

小篠より此所まで水なし。此所に少し雫水ありといへども，旱魃の年はなし。法頭門跡入峰の節は，此所にて法螺を吹て，一の多輪に知らす。宿地は金剛童子の前，平地の所なり。此間，油こぼし等難所あり。

山家集に，西行法師，大峰行者帰りは，児止りに続きたる宿なり。春の山伏，屏風たてと申所をたいらかにすきん事をかたく思ひて，行者児泊りにて思ひ悩（わず）ろふなるべし。

屏風にや　心を立て〔立てて〕　思ひけん
行者は帰り　ちごはとまりぬ

第十六　大多輪之宿

〔一の多和〕

峰中に多輪（たわ）といふ所三ヶ所あり。逆峰第一の多輪ゆゑ，一の多輪といふ。此宿地，今に退転なし。警固として，北山五ヶ村の内へ預け，毎年先達奥駈の節，村役人此所に登り，先達を饗応す。五ヶ村とは，白川村・川合村・橡本（とちもと）村・西の〔西野〕村・小瀬（こぜ）村なり。此所に金剛護世童子在す。

第十七　講場瀬之宿

〔講場瀬の宿〕

此所は光婆世僧正の墓前なり。今は唐金（からかね）の理源大師在す。中世迄，光婆世僧正の木像ありしが，首手足等朽失たりと。此僧正は飛騨国の大徳なり。又或書に曰く，彼僧正は上野の生れにて，此所に籠り居て，内裏へ僧正の官を願ふといへども，俗姓なしとて勅許なし。其後，帝頻りに悩せ玉ふに依て，僧正の官を賜り，祈禱を命ぜられゝば，御病速に御平癒ありしとなり。僧正は遂に此所にて寂すといふ。是に依て，今に修俗の者，此所を通るに，僧正の弟子なりと，三返唱へて通り行く。此所に金剛童子在す。此所，御山（みせん）へ八町もあらんかと，八町の金剛童子といふ誤りなり。本名は大及〔八葉カ〕といふ所なり。坂の名も八町阪にあらず，八葉阪なり。

（以上第 10 号掲載分）

第十八　御山鉢経之宿

〔弥山〕

此御山（みせん）といふは，深山とも書て，層巒（そうらん）畳嶂として，山路嶮し。巔頂（てんちょう）清浄にして，弁財天女在す。絶頂なりといへども，龍池あり。碧水盈溢，清潔柔軟なり。本社南向にして，天の川の本宮なり。依て，天の川より社人来りて，先達を饗応す。

〔鉢経の宿〕

又鉢経の宿といふは，今の宿所に非ず。此所の金剛香精童子より二町程脇に，持経といふ所あり。俗に八軒宿といふ。此所に役行者，大日経を石鉢に入れて納め玉ふ所ゆへ，鉢経といふ。或修行者一句。

深山曙発二前渓一輝　吉野春入二曲径一深

〔龍池〕

龍池二箇所あり。上水・下水といふ。上水は新客汲べからず。水忽（たちま）ち涸るといふ。俗行の者秘歌。

雲晴て　きよくも御山　水鏡　汲なさわるな　新旅の客

〔鷲の窟〕

此御山宿の脇に，鷲の窟あり。深密（じんみつ）の秘所なり。是は，天竺の霊鷲山（りょうじゅせん）の巽の角闕（かけ）て，当山に飛来し時，守護し来る鷲なりといふ。即ち鷲の形なり。春日大明神も本此岩屋にましまして，奈良の春日山へ飛せ玉ふといふ。此所にも金剛童子在す。

〔剣の山〕

御山を起て，奥駈下り口左りの方に剣の山あり。是来世の剣の山なりといふ。峥々として，吉野熊野より正面に之を拝すとなり。

〔菊の岩屋〕

深山（みせん）より禅師までの間に，天川辻・水の本・菊の岩屋とて，三ヶ所に金剛童子在す。此菊の岩屋は極秘所にして，神亀元年十月，役小角末徒義元，五十七歳にて此岩屋に籠り居る時，紙筆なくして，役君の本記を作り，杉を焼き，木の皮に書して，窟の中に残し置しを，其弟子義真，天平二年六月入峰して，此岩屋に籠り，本記を写し取るといへども，悲哉，義元入寂の後ゆゑ，闕所（けっしょ）等分り難し。然れども，闕所の儘，今に世に伝ふ。

第十九　禅師之宿

〔禅師の宿〕

大禅師・小禅師ともに難所なり。此所は，理源大師，峰中修行の節，正身（しょうじん）の金剛倹〔検カ〕増童子を祈り出し玉ふ所なり。此所は元より弥勒の浄土なりといふ。無着仙人といふ仙，此所に在す。又河原に石の塔あり。此禅師の宿を，世俗，神仙の金剛童子といふは誤りなり。神仙は，釈迦の嶽の東の下にあり。又此所の大禅師の宿地は，十津川原にあり。是より二十町許りあるべし。此所，真の宿地なり。

第二十　楊枝之宿

〔楊枝の宿〕

此所の宿は，御山より下り腰〔越カ〕着たる所を船の多輪といふ。金剛童子在す。此次を楊枝の宿といふ。宿は近き頃まであり しが，今退転して其儘なり。北山の原へ三町程下り，阿伽水あり。此宿地は，修行者の休息所なり。金剛童子在す。

〔仏生国の岳〕

夫より仏生国の嶽。此所を俗には釈迦如来誕生所といふ。稀代（きたい）不思議の所なり。十六羅漢・五百羅漢等在す。拝すべし。

〔七面〕

又七面といふ嶽あり。此に窟見ゆ。この窟に鬼神，今に棲て，折には心あしき人を取食ふといふ。此嶽は峰中なびきの中七所あり。之を見るに，背かざるがゆゑに，七面と名付く。

次に東方浄瑠璃世界，薬師の浄土といふ所あり。又西方極楽世界，阿弥陀の浄土といふ所あり。次は四十九院の東門なり。神仙まで四十九院あり。無障不惑の者は，此所にて鐘鈴の音を聞くなり。

第二十一　空鉢之宿

〔仏生岳〕

此辺，仏生嶽といふて，小尻返し・貝すり・椽の鼻・念仏橋等の難所なり。金胎両部分けとて，巌を切割し所あり。是等不思議の所なり。

〔空鉢〕

又空鉢といふは，役行者，父母の菩提のため，密呪力を以て，天竺の法道仙人を祈り迎ひ，導師として，千本の率都婆を建て，供養ありし所なり。又空鉢といふは，高き岩なり。上に三所に石鉢あり。役行者，如来へ供物を捧し鉢なりと。中央は釈迦如来，左右は文珠・普賢へ備へ玉ふに依て，今に毎日午の時，如来影向し玉ふて，此鉢を行ひ玉ふとなり。同所に，役行者所持の如意と錫杖と，今にありといふ。依て，此

所東の方に帝釈天，西の方に千手観音，後の方に十二神在して，守護あるといふ。又東の谷には，七仏薬師在す。空鉢の宿地は今，金剛童子の前なり。修行者一句。

小柴焼尽シテ経亦尽キ　樹声谷響テ自ラ説法

〔杖捨〕

又杖捨といふ所あり。修俗ともに是迄突し杖を，此所に建置なり。杖は修行者の碑伝なるゆゑ，修俗後世菩提のためとて，此所に捨て，神山（じんぜん）にて新に求ることを古例とす。俗行の者秘歌に，

御仏の　生れ玉へし　国なれば　捨置杖は　後の世のため

（以上第 11 号掲載分）

第二十二　釈迦嶽の宿

〔釈迦が岳〕

此宿は，釈迦が嶽の絶頂にして，峯中第一高き所なり。空鉢より八町。頂上に小殿あり。八葉を脱で行道す。内に釈迦の三尊の像を安置す。傍に骨堂あり。麓より嶮巇（けんき）を攀（よ）づ。深邃（しんすい）を撥て，漸く尊前に至るに，四望障りなく，八紘眼に遮らず。恍惚として個夢個覚なり。峭巒峨々（がが）として，風は浄刹の扉を払ひ，危渓沓々として，雲は塵寰（じんかん）の跡を埋む。

曩祖（のうそ）修練の時，紫雲の中に能仁（のうにん）真容を顕し玉ふゆゑ，釈迦が嶽と号くと云云。又曰，釈迦如来，天竺の霊鷲山にて説法の体想に似たるに依て，釈迦ヶ嶽と名付るともいふ。

此所にて種々の秘伝・古例等あり。先達に付て聞法（もんぼう）すべし。修法畢（おわり）て，夫より神仙（じんぜん）へ十八町下る。修行者一句。

霊鷲雲ハ淡シテ覚フ二天ノ近キヲ一　前鬼水ハ冷シテ知二地ノ霊ナルヲ一

俗行の者秘歌に，

正覚（しょうがく）の　峰に登りて　詠むれば　五百羅漢は　蓮台の下

段々と下る眼下に，十六丈の青不動といふ岩あり。頂上より十五町斗り下り，なひきの左り半町斗りに，阿弥陀の拝殿あり。神変大士護身の閻浮旦〔檀〕金の阿弥陀，御長一寸八歩の尊像を埋み玉へし所なり。依て，阿弥陀の呪を唱へて法楽す。又或書には，御長六寸五歩ともいふ。石室に入て，上に吃里具〔きりくカ〕の梵字あり。其上に石を積重ねて，隠し奉るといふ。

又此辺の神仙へ，知らせの法螺吹の大なる石の際に，婆羅門僧正の筆の大般若経を石の唐櫃にいれ，蓋に鑁字を彫付，顕はにありしを，二百年ばかり以前より，其処に埋みしとなり。

又当山の長く下る尾崎に，役行者の建玉ふ石の塔婆二基あり。

釈迦ヶ嶽の巽み，神山の東南を去ること三里斗りに谷あり。佐多那川といふ川あり。其北辺に三重の滝あり。此滝の奥に五大尊嶽あり。下に岩屋あり。五大尊在す。又此奥に，樒（しきみ）の七抱斗りの大木の根に，土際をさること六尺斗りに，白蓮花出生の所あり。但し，承久の乱の頃は失たることありともいふ。

又涅槃嶽の南，釈迦嶽の東南を去ること一里斗り，南に向て横に大なる石あり。其上に三つの石蓋の所あり。石門重といふ。広さ一丈斗り，高さ五丈程。不可思議の所なり。門の外に，二天の像あり。左右に一つ宛の額石あり。其門の南の方に，巌石室あり。童子一人石の像なり。長け四尺なり。又門の北脇に，楼并三重の石室あり。是仙霊の窟なりと。室を去ること五たん斗りに鐘楼あり。石鐘を掛たり。高さ五丈斗りなり。東北に山あり。羅漢の嶽といふ。高さ五丈。其下の東の頭に室あり。広さ二間。其近辺に生ずる木は，是不可思議数の仏体なり。

又涅槃嶽の南，楼山の西に石室あり。広さ五間，深さ三丈。

又孔雀明王の嶽の東に，一つの巌室あり。此

窟に風雨なし。是を名付て，隠石室といふ。西に向て石室あり。瑠璃室と号す。其上に舟の出る如き岩あり。高さ六尺，侄〔径カ〕り七尺。南に向て獅々岩あり。其東脇に崛あり。高さ一丈五尺。

又大日嶽の東に，千手の嶽の南に磊山あり。皆刀剣の如し。又宝蔵に似たる岩あり。高さ一丈斗り。其上に二つの石あり。其内に水流れ出で，増減なし。

又千手嶽の北，深山の嶽に当つて，一つの山あり。其上に大盤石（ばんじゃく）あり。其上に二つ石あり。其形，鸚鵡（おうむ）の行歩するが如し。ゆゑに鸚鵡嶽といふ。

又神山を去ること二里，其西に池あり。一つの山あり。宝塔嶽といふ。大なる巖あり。本は一つにして，末は五つに分れあるゆゑに，五鈷嶽ともいふ。其岐の半に，各々一つの窟あり。三つ宛の石ありて，清水流れ出で，四辺を周る。

又涅槃嶽の頭上に，高さ二丈の石剣あり。

又釈迦嶽の南に，大般若の岩室あり。龍神八部，今に守護し玉ふといふ。

第二十三　神山の宿

〔深山〕

此所は，役行者，誠に兜率（とそつ）の内院に似たる所とて秘所とす。本堂の前に，護摩の炉壇あり。此所にて，順逆の諸先達，天下泰平・五穀成就の柴燈大護摩あり。傍に灌頂堂あり。内に舒明帝の聖像安置す。此宝前に於て，諸修行者，入壇灌頂す。又金剛童子在す。妙覚門あり。多聞・持国・増長・広目の四天在す。広目天の臍と申所より，閼伽水出る。俗行の者秘歌に，

天神の　腹より出る　香水は　我等が元の乳味なりけり

又増長の頭に，日本指図の箱といふものあり。又石の行者の像あり。次に正明童子。又仙人の一つ柱，胎内くゞり，行者門石抔（など）といふ所あり。此所，近き頃までは宿七つありしとかや。

又行者堂一町斗り外に，嶮岩の半より香精水出る。何たる旱魃にも干ることなし。但し，新客の者，之を汲ば，忽ち止む。

又光精〔香精カ〕童子の前に来り，護摩場へ至らざるに，左の手に大なる石あり。其上の小石は伽利〔訶梨〕帝母（かりていも）なりといふ。

此所の外に密阿伽水あり。大谷の閼伽水は，神仙より五十町斗りにあり。縦ひ阿伽を汲ずとも，一度此所へ下り，拝見すべし。殊勝の所なり。且内院秘所多し。

山家集に，西行法師，大峰の神仙といふ所にて，月を見てよみける，

深き山に　すみける月を　見ざりせば　思へ〔ひ〕でもなき　我身ざ〔な〕らまし

（以上第 12 号掲載分）

又此所の内院に，弥勒の浄土あり。先づ巽門，又都津御門ともいふ。是は外の門なり。又内院の門あり。次に内院なり。弥勒仏の出世し玉ふ時，八万の聖経（しょうぎょう）出べき所なりといふ。依て，諸神諸仏毎日集会（しゅうえ）の処ゆゑ，此所にては，曼荼羅にも漏れたる諸仏を拝することあり。依て，役行者，一夏（いちげ）九旬には，此所に籠り玉ひしとなり。役行者御守の金胎両部の阿弥陀在す。前に大唐より来りしといふ金の火舎（かしゃ）あり。

又御骨神道の岩屋あり。是を両部の壇といふ。行者七生の御骨在す。又日光・月光顕れ玉ふ窟あり。

又神山の北裏に，行者如法経を書写し玉ふといふ洒水（しゃすい）あり。岩中七尺高き所より出る。是は経ヶ嶽の西なり。

四天王石の下，第一の石塔の西に，十一面の岩屋あり。四天の石の下，第一の岩屋に弁天，二には聖天，三には行者，四には光晴〔香精カ〕

童子あり。

神山西の谷へ下るに，左に塚あり。行者六生の塚なり。

五嶽山，なびきの右の方にあり。此嶽の西の方に，面広き石顕れある。是は，大日嶽供養の日の高座なり。

神仙，順の法螺吹より一丁計り南，道の傍に聖天立玉ふ。人丈けより高し。此所聖天の森といふ。此下に叢祠あり。鋳像一尺計りの聖天を安置す。俗行者は拝することを得ず。

五穀石，行者脚絆石，経塚戸〔石カ〕，長競石，次は小尻返し，螺摺，白髪童子等といふ所，越下り行て，金迦羅（こんがら），制吒迦（せいたか），倶利迦羅岩等，右にあり。段々下りて，女人結界といふ所に，金剛童子在す。

〔前鬼〕

此所を過て，前牛に入る。前鬼とも，禅鬼とも書く。此前牛の里といふは，北山十五ヶ村の内，桑原，寺境〔垣〕内（てらがいと）に并び，国見山，伯母谷の西にありて，巖巒聳え，林壑（りんがく）邃深（すいしん）にして，山路険しく，人跡絶たる所なり。

前鬼の子孫，此所に住す。今の鬼童は大法院，実名西村大学。鬼熊は報恩院，実名堀内将監（しょうげん）。鬼継は尊龍院，実名森村右近。鬼助は伝法院，実名小中靭〔靱〕負（ゆげい）。鬼上は賢徳院，実名中村織部なり。

行者堂あり。又鎮守妙見の社あり。これ日本随一の霊場にして，今に天より北星降るといふ。此所の号を，国軸山金輪皇寺三滝院といふ。是は天平七年，聖武皇帝の勅号なりといふ。今の五鬼の居所は，往昔橘都長宮の跡なりといふ。誠の五鬼の居所は，三重の滝の脇にありしとかや。又先達并同行の修俗，前牛へ下りし節は，此五軒の内に宿す。俗行の者秘歌に，

谷底に　阿吽の虹の　立ける は　誠に鬼の
住家なるらん

〔裏行場〕

此所にて一日，三重の滝詣ですべし。先づ前牛を出で，八町計りに，乞路の地蔵。夫れより一なびき計り行て河あり。垢離取場といふ淵あり。中に平壇の大石あり。広さ丈余。昔し本寺の先達，此石上にて天狗の形を顕し，飛失せけり。夫より以来，此石上にて光明真言を唱へて，魔道救苦の回向す。次に手水滝。旱天にも水へらず。次に大黒の岩屋。次に行者の阿伽井。又弘法大師の閼伽水。次に弁財天の森に宮あり。弁天の社の次に，日光月光の滝。次に初重不動の滝。滝の下に窟あり。弘法大師，爪を以て彫玉ふ碑伝あり。法名西然と印し玉ふ。次に，地の三十六禽といふ梯子を登り，不動の岩屋あり。次に二重の滝，馬頭の岩屋。次に，弘法大師一千日護摩を修し玉ふといふ窟に，仏具鈴杵（れいしょ）等あり。此間に，弥陀の像を彫りたる岩あり。次に屏風の横駈。岩の半腹を通るに嶮難なり。此岩，大師の呪力に依て，暖なること人膚の如し。次に，天の二十八宿の梯子を登り，次に鷲の岩屋あり。役行者は，此岩屋に籠り玉ふ。今の世に流布する行者の像は，此窟を図するなり。次に鷲の嘴岩。俗人の曰く，此端増長すれば，世に災害ありとて，三度之を打て過る。次に三重の滝，千手の窟あり。是奥の院なり。次に白山の社へ帰る。

此行処，始より終りまで百八町あり。百八煩悩を断ずとなり。此三重の滝の秘所は，峰中の肝心。就中，初重の滝の高きこと数十丈にして，冷泉漲り落て，白布を曝すが如し。水気逆ばしり飛んで，大雨を下すが如く，寔（まこと）に普天（ふてん）の勝区（しょうく）なり。或は階梯に登り，尊容を揖（ゆう）し，或は嶄岩に攀て，聖跡を訪（と）ふ。片足もし過れば，再び還ることを得ず。一心僅に戻れば，更に進むこと能はず。重垢の者は行はず。薄福の者は拝見することを得ず。誠にこれ，軀命（くめい）を惜まざるの境界なり。仰ぐべし。惶（おそ）るべ

し。慎しまずんばあるべからず。修行者一句。

三重漲流捲二国軸一　霊鷲高聳徹二金輪一

俗行の者，此所にて秘歌に，

三重の　秘水に身をば　清めつゝ　仏の国に　いたりいたりて

翌日は前鬼を起て，奥駈の路，醍醐辻といふ所へ登り出るなり。

（以上第 13 号掲載分）

第二十四　大日嶽の宿

〔大日岳〕

神山を起て，大日嶽の麓へ至り，左は前牛の路なり。右へ登りて大日嶽へ至る間に，役行者，大般若経を納め玉ふ石の櫃あり。石蓋甚だ麗し。路の中にあり。この上をなひきにして通る。秘所あり。

大日嶽の頂上に，両部大日如来の銅像あり。又五智宝冠あり。是は，舒明天皇の宝冠なりといふ。前に龍神の雨蓋といふ石三枚あり。上に宝剣あり。若じ〔し〕此剣石を動せば，大雨降りて鳴動す。慎むべしといふ。その側に両部の曼荼羅石あり。又石の鏡あり。神山にて灌頂し，大日嶽にて禅定し，宝冠を戴き，石の鏡にて我姿を見る秘伝あり。俗行の者秘歌に，

六道の　ちまたを出し　印しには　戴き参る　五智の宝冠

又立石仙人といふ巌あり。大日嶽供養の日，天降らず。供養終りて，石の塔婆を埋め隠せし後に降り，此由を聞て，恨みを含み，慈尊の出世を待んと，密に此所に給仕せりにいふ。

次に南へ少し行て右の方に，石像の不動明王あり。外に童子一人供奉せり。

蘇莫者の嶽よりまへに左りの方に，棟をあけたる如き岩屋あり。これ三重の滝へ下る一の宿といふ。この岩にて，先達計り錫杖経を読むこと口伝（くでん）なり。

次に蘇莫者嶽に石あり。仙人降りて，そまくしやといふ舞をもふ所といふ。

神山より小池の間，笠を着ざるといふことあり。此辺は仙人の遊び玉ふ所なりとぞ。

石楠花嶽といふ所あり。嶺の右の方に，役行者の隠し御手水あり。

第二十五　小池の宿

〔小池の宿〕

奥駈修行者，今はみな前牛へ下るゆゑ，小池の金剛童子を行ふ者なし。此小池は，役行者峰中に祈りし秘水の其一なり。池の端の石の本に，聖宝理源大師，如意宝珠（ほうじゅ）を納め玉ひ，今に龍王，是を守護す。此池は則ち龍宮浄土なりといふ。此宿より十町計り行と，左りの方へ路あり。太古辻とも，堂の森ともいふ。前鬼より峰中のなひきへ登り出る口なり。山家集に，西行法師，大峰小池と申す処にて，

いかにして　梢の隙（ひま）を　もとめえて　小池に今宵（こよい）　月のすむらん

第二十六　拝返の宿

〔乾光門〕

これ乾光門のことなり。此所に金剛童子在す。発心門・等覚門・妙覚門・乾光門の四門を越て，権現・弁天・釈迦・大十〔日カ〕，其外大峰満山の護法神を，此所より拝返すの義なりといふ。又一名，証誠無漏の嶽とも云ふ。此嶽の頂は，五智如来の霊場といふ。此所の二町計り前に，右の方へ少し入て，長き石あり。聖天在す。此嶽の南に，四孝〔季カ〕の北〔花カ〕園あり。常光童子，守護なし玉ふといふ。

第二十七　篠の宿

〔篠の宿〕

宿地は，今の峰中の道筋より二里計り十津川の原にて，花瀬といふ辺なり。此所に篠の滝，又は石鐘等，其外殊勝の霊地なり。今絶て行はず。古記に曰く，篠の宿，逆の法螺吹より宿へ二町計り行付ず，左の方の路の端に，宿地の方

へ向き，小き岩屋あり。是は吒祇〔枳〕尼天（だきにてん）の岩屋なり。中に狐の頭あきらかにあり。この岩屋の傍を，逆へ少し下る所を，愛染の瀬戸といふ。此所も不思議の地なり。又彼窟の西の方，逆には右の方，大なる石の額の如きものあり。これ又吒祇尼天の舌といふことは，近来の俗説なり。昔しは其説なきなり。此岩屋のうへに，左の方に卒都婆立たる処の向ひは，聖天の御座処なり。谷を越て一里あり。古記に云く，此処に剣光童子在す。則ち剣光門といふ。額石，顕はにあり云々。

第二十八　持経の宿

〔持経の宿〕

此間に，阿須加利か嶽といふ難所あり。此宿は，役行者所持の孔雀明王経を納め玉ふ所ゆへ，持経の宿といふ。則ち金剛童子在す。

第二十九　平地の宿

〔平地の宿〕

此所は，聖宝理源大師，毒龍を退治し玉ふ所なりといふ。此宿は今に退転なし。池郷の内，上池原・下池原・池の峰〔池峯〕・北〔佐田カ〕村とて四ヶ村の預りにて，毎年先達を饗応す。山家集に，西行法師の歌に，大峰平地の宿と申所にて，月を見けるに，梢の露のかゝりければ，

梢な〔も〕る　月も哀を　思ふへし　光りにくじく〔ぐして〕　露のこほるゝ

又行て，転法輪ヶ嶽あり。此嵩は，西に五大明王在す。東に愛染明王あり。山頂に，釈迦如来説法ありし座石といふ石あり。次の石は舎利なり。同嶽の下に倶利伽羅嶽あり。倶利伽羅明王在す。山家集に，西行法師，大峰転法輪の嵩と申所にて，釈迦如来の座石をおがみて，

爰（ここ）こそは　法とかれし〔ける〕　所よと　聞さとりをも　得つるけふ哉

此平地と申所は，昔し大蛇すめり。理源大師，大峰中興の砌（みぎ）り，彼蛇を呪縛して，遙の谷に投玉ふ。其所忽ち池となる。其霊を祭り，池峰大明神と号す。則ち北山の鎮守とす。池の長さ四町余，横二町。全水清潔にして，一塵も浮ばず。池中に浮木あり。古老の伝ていふ，天下に凶事あれば，彼浮木自ら岸に踊り出て，事止めは，則ち水中に帰るといふ。古来より凶事ある毎に，岸に踊り上れり。又近代大旱（ひで）りに依て，人民雨を祈らんが為に，ある名僧を誘引て，筏を作り，池水に浮む。時に筏，池中に至て，少しも動くことなく，已（すで）に沈まんとす。依て僧俗，大に驚き怖れて，声を上げて，役行者・理源大師を祈念するに，不思議に筏，漸く動くゆへ，岸に付て，恐れ逃退く。時に晴天俄（にわか）に曇り，雷霆（らいてい）地を震ひ，大雨車軸をなしけり。今に霊験ありといふ。

（以上第 18 号掲載分）

第三十　奴多之宿

〔奴多の宿〕

此所，峰の池の内，寺垣内（てらがいと）・裏向井〔浦向〕・佐多〔田〕（さだ）・下桑原・上桑原五ヶ村の領分なり。先達并諸修行者，前牛を起て，多く此所を止宿とす。或修行者の一句に，

一夜草庵孤客枕　風雨打レ扉覚二迷夢一

此奴多を出て登り，左の方に卒都婆を立たる所は，役行者，如法経を埋め玉ふ所なり。依て法楽を修す。夫より左多〔佐田〕の辻といふ所あり。俗行の者秘歌に，

峯々を　わけ行見れは　谷深し　奴多や平地に　登る朝きり

第三十一　行仙之宿

〔行仙の宿〕

此宿は北山寺垣〔寺垣内〕の領分にて，段々登り，天狗ヶ嶽あり。

第三十二　千ヶ嶽之宿

〔千ヶ岳〕

一名を千種が岳ともいふ。此所に笠捨といふ所に，金剛童子在す。此岳の最上に，牡丹の花，殊に勝れ，美事なるありといふ。なびきより右の方へ入るなり。此所峰秀で，最雄岾として，南を眺めば，磊状碁を布（しく）か如し。山家集に，西行法師，大峰の千種ヶだけにて，

分て行　色のみならず　梢さへ　千種か嶽は　心そみけり

此所の西の方，大山の腹に，阿弥陀の三尊在す。役行者の母公の墓なりといふ。

〔姨捨山〕

又地蔵嶽・姨捨（おばすて）山抔といふ所あり。山家集に，西行法師，大峰姨捨山といふ所を見渡され，思ひなしにや月ことに見えければ，

姨捨は　信濃ならねと　いつくは〔に〕も月澄峯の　名にこそありけり〔れ〕

又拾遺愚草（しゅういぐそう）に定家卿，

三芳野や　姨捨山の　春秋は〔も〕　ひとつにかすむ　雪の曙

近代までは，此千ヶ嶽より四阿屋宿・檜木宿・御池宿・古屋宿・玉置糧宿と行ひしを，凡三百年斗りも，此千ヶ嶽より葛川（くずかわ）村へ下る。是行山より古屋まで，水なきゆゑなりとぞ。

第三十三　四阿屋之宿

〔四阿屋の宿〕

笠捨より凡二十町程もあるよしを聞し斗り。道絶てなし。東屋の嶽の頂上より右の方，二里斗り下り，西の方に五嶽といふ所あり。極楽浄土なりといふ。即其所に仙人の住ける洞ありて，絶景なりといふ。山家集に，西行法師，大峰のあづまやといふ所にて，時雨の後，月を見て，

神無月　時雨はるれは　東屋の　峯にそ月は　むねとすみける

第三十四　檜之宿

〔檜の宿〕

葛川村の西南に当る嶽なり。其処に今に唐金の徳利一つ，五抱余りの檜の本にあるよし。其徳利に梵字多くありて，葛川の山賤（やまがつ）・木こり，是に手を触れば，忽ち祟りをなすと云伝へ，其辺に行人なしといふ。

第三十五　御池之宿

〔御池の宿〕

葛川村より高瀬村へ越る道より五町程北西の方に御池あり。役行者，此池にて蔵王権現の仏性体を祈り玉ふに，此池に顕れ玉ふゆゑ，御池の宿といふ。御池の前一段斗り左りの東の頭に児塚あり。其東の谷に石の塔あり。阿育（あいく）大王八万四千塔の其一といふ。又窟あり。火を燃して入るべし。大日如来霊仏在すといふ。

第三十六　古屋之宿

〔古屋の宿〕

葛川村より玉置山へ登る二里余上に，能き平地あり。其所に小池あり。宿地も数多し。此所の本阿伽井の外に，仙人の密水といふあり。此宿地は昔し，理源大師，醍醐天皇の勅に依て，大峰にて金を堀り玉ふ所，四ヶ所。則ち，生津山・紫雲山・中奥山・玉置山なり。此時の奉行として，平井丹後守・神戸左京亮の両人を添られたりと。又屋敷を建たる跡あり。此所に金剛童子在す。此宝前にて，峰中修行の修俗，相撲を取ること古例なり。又此所にて，肩箱を買求るも古例なり。夫より昔しは，此宿より葛川へ下り，一宿せしといふ。此所，昔しは花折の宿と言ひしといかふ（ママ）。次に，業の秤りに掛る所あり。是も古例なり。次に六道といふ所あり。此所にて，犬の吠る真似をして通ることも古例。

玉置と古屋の間に，例法水といふ水あり。古屋の方石〔右カ〕五六段入て道あり。経尾又土室ヶ嶽といふ。

第三十七　玉置糧之宿

〔玉置山〕

玉置山へいる此方に，路の右方に玉石あり。拝すべし。玉置山入堂の次第は，先玉置大権現，本地三所，中は地蔵，左は千手，右は毘沙門，次に白山権現，次に山護神〔三狐神カ〕。是は玉置の地主神なり。次に悪除金剛童子，次に大日・不動，次に子守明神。又子守の上は，役大士，如意宝珠を埋め玉ふ所。大日堂は，役行者の建立，本尊は行者の御作なり。後の小大日仏は，弘法大師の御作。又稲荷社の金剛童子ば〔は〕，行者建立以前の事といふ。大峰奥駈の先達，此処に着すと，神事・神楽・馴子舞等あり。此所にて諸道者，衣服をぬぐといふことあり。是冥途の三途川にて，婆々と焔魔と着る物をはぎとる心なりといふ。先達は焔王，玉置の住主は婆々なりとて，布施若干を取ること古例なり。俗行の者秘歌に，

御社の　玉垣きよき　誓ひにて　迷ふ衆生を　照す玉石

彼修行者も一句。

玉置校含万年翠　奴多竹浄今古声

玉置を起て，修俗多く竹筒（たけとう）村へ下り，夫より舟にて新宮へ参る。是逆なり。誠は玉置より切畑村へ行を，当山の修行とす。本山は切原村へ行を順とす。

第三十八　水飲之宿

〔水飲の宿〕

此宿は，玉置より切畑道を三十町斗り行て，中程に玉置辻といふ所に，左手へ一町斗り入て，秘水あり。是善如龍王のすみ玉ふ所なりと。其辺を水飲の宿地といふ。此所は昔し，真言宗真済僧正，此所に籠りて，金剛慈悲童子を祈り出せし所にて，本堂ありて，宿も多くありし所なりといふ。

第三十九　岸之宿

〔岸の宿〕

水飲より一里斗り行て，平地なる所に，地蔵尊の小き辻堂あり。此所宿地なりといふ。

第四十　金剛多輪之宿

〔金剛多和の宿〕

宿地を其所の人に尋ぬるに，今は廃れて，金剛多輪といふ所を知らず。其辺に金剛屋敷といふ所に谷渡りあり。是多輪の宿地ならん。又此所の峰に，石の率都婆ある所を，六道の辻といふ。

（以上第 22 号掲載分）

〔参考〕大峯四十二宿地

第一　六田渡〔柳之宿〕

〔六田〕

吉野川渡に三ヶ所あり。上市の渡を，桜の渡と云ふ。瀬の上を，梅〔椿カ〕の渡と云ふ。六田（むだ）を渡るを，柳の渡と云ふ。

聖宝師，渡守六人を置く。古歌に，

父母の　織りて着せける　から衣　今ぬぎ捨てる　吉野川水

桜の渡〔馬カ〕場登り口に石像あり。役行者を安置したる辻堂あり。則ち柳の宿地なり。

第二　丈六堂宿

〔一の蔵王堂〕

一の蔵王堂と云ふ。寺の寺号は勝福寺。俗に，一の行場と云ふ。

是よりは　後世（ごせ）の願の　要ぞと　あふぎの風の　心涼しき

第三　峯の坊宿

〔峰の薬師〕

長峯の薬師なり。本尊は峯の薬師，三体の内一体なり。役の行者守本尊と云ふ。此辺より千本茶屋まで永峯と云ふ。此間に，村上義光（よしてる）の石の碣（いしぶみ）あり。古歌〔飛鳥井雅章〕に，

吉野なる〔山〕　花のゆう〔ふ〕して　かけまくも　かしこき神の　こゝろをぞしれ〔る〕

千本茶屋より黒門まで関屋の花と云ひ，又隠れ松と云ふあり。身生地蔵堂なり。日蔵上人の遺跡なり。

（第四～第四十　略）

第四十一　吹越の宿

〔吹越〕

吹越と云ふは，峯中七十五靡を経て，初めて川を隔て，紀伊の地に入る。此宿なる故に，吹越と云ふ。此所，金剛除魔童子在す。嶺を大極〔黒カ〕天神の岳と云ふ。当山先達八月十日に登り，吹越権現の社前に於て，峯中結願（けちがん）に，天下泰平・国土安全の柴燈大護摩を修行す。此の所に，役行者・聖宝尊師の御影堂あり。当山は大井〔大居カ〕村大善院預りにして，当山先達より銀一枚頂戴。今は八月朔日に登山して，祭礼を執行す。

第四十二　膳是自須〔順〕の宿

〔本宮〕

是れ，熊野権現本宮の内なり。当山にては清浄殿と号す。本山にては長床宿と云ふ。俗行者は千遍屋敷の御殿と云ふ。秘所にして，顕露することを許さず。御前渡の秘歌。

日の本の　人の始めを　尋ぬれば　苔の滴くや　芦原の里

夫より熊野三山を礼拝す。本社巽向にて，本社阿弥陀如来，脇の宮十二社権現。礼前には執金剛在す。門の東に弁財天，理源大師作。門の左右に大黒殿，役の行者，弘法大師作。奥院，地主権現。又音無の天神。名所多し。

〔湯ノ峰〕

本宮より湯の峯へ二十五丁。此間に小坂あり。登り坂の此方に小岩屋あり。中に聖天社在す。湯の峯は本堂，本尊薬師如来の祠あり。湯の花自然の仏像，熊野権現の祠あり。又二重の塔あり。河中に霊湯出る。湯壷三つ。西男湯，中女湯，東上湯。此所にて昔，常陸国の大名，小栗判官と云ふ者，毒酒にて死せしを，再び蘇生ると云ふ。

〔新宮〕

本宮より舟にて新宮に至る。新宮大権現は，人皇十二代，景行天皇御幸ありて，宮社遷造立

なし玉ふ。本社，本地薬師如来にて，巽向ふ。諸神安置す。

〔神倉〕

城下を右の方に，神蔵と云ふ。石階を上る事，三丁余。上に本堂あり。巌に造り掛く。六間に十二間なり。本尊神蔵権現，又十一面観世音，愛染明王。内陣に，磐石の不動明王等なり。申刻以後，参詣を許さず。魔所と云ふ。

次に輪崎〔三輪崎〕村，弁財天の社，行所。佐野村に，那智黒と云ふ碁石あり。次に，位〔二位カ〕の尼の石塔あり。孤〔狐〕島と云ふ所に稲荷の社あり。次に宇貝井〔宇久井〕浦。次に浜宮〔浜ノ宮〕，浜明神並に補陀落寺，本尊，千手観世音。次川端〔川関カ〕村，飛鳥社，威真明王。次井関村，妙見社。一の〔市野々〕村，天照皇太神，葺不合尊之社。

〔那智〕

夫れより那智滝。本中滝は日本第一とす。此那智は，本堂，観世音堂，塔宮社寺坊等あり。誠に極楽の浄土なり。麓の下十八丁，仁王門より八丁と云ふ。

〔妙法山〕

此所より西の山に続く，妙法山とて霊場あり。此の所は女子の高野と云うて，殊勝の所なり。那智より二十五丁と云ふ。難所の坂道なり。此所にて熊野三山の拝所修す。

〔大雲取越〕

此の所より本宮へ参る者は，那智を出て小口（こぐち）と云ふ所まで四里。大蜘蛛とり〔大雲取〕，胴切坂等の難所なり。

峯中先達の大辺地越とて，本街道を行し，那智の宿坊を越て，湯子〔湯ノ川カ〕村温水あり。此村口に田少しあり。弘法大師，法力を以て植付せしより草生えず。肥しせず。水の憂なく，不作なし。之れより追々と紀州路を参詣して，和歌山の方へ下行す。

古〔故〕実・秘事・作法・行事等は別に伝授す。大峯峯中作法，行事，役行者本記等の秘記は，別に在り。未灌頂の者には伝授せず。

On a Historical Record of the Forty-two Sacred Places in the Omine Mountains in the *Jimben*, a Shugendo Journal

Masayasu ODA*

This paper introduces and republishes a historical record about the Omine Mountains, one of the most famous sacred mountains in Japan. The Omine Mountains have long been a locality of mountain pilgrimage peculiar to the Japanese mountain religion called Shugendo. There are some types of historical records describing sacred sites in the mountains, one of which is an account of forty-two sacred places, *shuku*. Records belonging to this type are so rare that we have very limited access to them. These articles, which appeared in the *Jimben*, a Shugendo Journal, from 1909 through 1911 are republished in this paper.

* Department of Geography, Komazawa University